

片翼だけの天使

生島治郎



翼だだけの天使

生島治郎

集英社

片翼だけの天使 かたよく てんし

一九八四年八月三十一日 第一刷発行
一九八五年六月三〇日 第一四刷発行

定価 九八〇円

著者 生島治郎 いくしまじろう

装丁者 山野辺進

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

出版部 二三八―二八四二
電話 販売部 二三〇―六一七一

製作課 二三八―二九六四
印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

五丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

目次

肉欲の街

5

苦い蜜

46

三角関係

87

一步後退二步前進

132

偽りの別離

176

離婚

218

片翼だけの天使

肉欲の街

そこは、とても天使などいそうな街には見えなかった。ブルー、ピンク、紫、色とりどりのネオンが妖しく咲き乱れ、それらのネオンの花々に誘われて、獣じみた眼をぎらつかせた男どもが一時の肉欲を満足させるために通ってくる街だった。

越路玄一郎がその街へふと行ってみる気になったのは、別にさしせまって肉欲を満足させなければならぬ事情があったからではなかった。

むしろ、彼はそのとき一種の疲労感にうちのめされていて、なにかこうばあつと華やかな世界にひたつて、その疲労感から逃れたい心境にあった。

第一、彼はさしせまった肉欲を満足させなければならぬほど若くはなかった。

越路は四十五歳、すでに中年というより、初老に向かいつつある年齢を迎えている。

無名ではないが、有名でもなく、かつて新人の頃、非常にポピュラーな新人賞を取ったことがあって、それ以来、まあまあ原稿の注文が切れない程度の仕事にありついている中堅の推理小説家である。

だから、金はあるほど持っているわけではないが、ぎりぎりの生活を強いられるほど不自由もしていない。サラリーマンで言えば一流企業の部長程度、中小企業で言えば、社長程度の収入はある。

十年前に離婚して以来、都心のマンションで気ままな独身生活をつづけていて、はためには優雅な生活に見えるにちがいない。

いや、これまでは、彼自身もその生活に満足していたふしがある。

しかし、あくまでも、これまではである。

四十の半ばを過ぎようとしている今、越路は独り身の

生活になんとなくとましきを覚えるようになっていた。

たしかに、独身生活は自由ではあるが、その自由を確保するためには、さまざまな不自由を耐え忍ばなければならぬ。

衣食住にかかわるさまざまな雑用を自分独りで片づけねばならない。若くて体力のあるうちはなんでもなかったそれらのことどもが、最近ひどく億劫になってきた。

衣食住ばかりではない。女とのつきあいもそうである。この十年の間、越路は何人もの女性とつきあってきた。

さまざまなつきあい方をしてきたのだが、いつもある線以上は踏みこんでこれられないように用心していた。彼は大切な砦を守るように、自分の独身生活を守ってきた。女と知り合い、ある程度の愛を交わし、なおかつ自分の砦に踏み入れさせない——そんなことのくり返しが、今はなんだかうとましく煩わしくてならなかった。

彼が今望んでいるのは、そういう煩わしい思いをしないうですむ男と女の関係だった。

そんなことができるだろうか？

「できる」と答えた友人がいた。

できる——と答えたのは、越路よりひとまわりも年下の友人、白井完介である。

完介は売れっ子のカメラマンで、あちこちを精力的に飛びまわり、仕事にも遊びにもエネルギーを奔らせているという印象の男である。

三十三歳の彼を見ると、越路はダイナモを備えつけた機械がブンブンうなりながら動きまわっているのを想像する。自分が三十三のときは、こんなに元気だったろうかと思ってしまう。たしかに、今よりは活気にあふれていたにはちがいないが、完介ほどエネルギーではなかったように思う。

売れっ子であるだけに、完介は仕事の方も多忙をきわめているが、その寸暇をさいてはちょこまかと身体を動かして、あらゆる遊びにもまめに手を出していた。

そんな彼が越路のなげきを聞くと、即座にこう答えた。「越路さん、それには打ってつけの場所がありますよ」「煩わしい思いをしないで、気を晴らしてくれる場所があるとどうかね？」

越路は疑わしそくに言った。

「まさか、トルコじゃあるまいな」

「そう、そのトルコです」

くりくりとした眼を輝かせながら、完介はひと膝乗り出した。

「越路さんの年齢だと、赤線への郷愁が強すぎて、トルコへの偏見がありすぎます。今のトルコへ行つてごらんなさい。至れり尽くせりで男のパラダイスですよ」

「トルコなら、行ったことはあるさ」

越路は何年か前にトルコ通いをしたことを想い出した。あの頃は、ただ風呂に入りマッサージを受けるか、せいぜい、スペシャルのサービスをしてもらうだけだった。

むしろ、そういう限界のあるところで女性を口説き、スペシャル以上のサービスをしてもらうことにスリルを味わったものだ。

「今のトルコは至れり尽くせりだから味気ないんじゃないのかね。すぐに本番をやらしてくれらるんだろう？」

「越路さんも古いなあ」

完介は苦笑をもらした。

「それはそうだが、それなりのテクニックは相手によつてちがうんですよ。越路さんたちの世代は赤線みたいなしめった情緒を望むんでしょうが、トルコにはたしかにそんな情緒はない。乾いていてドライでゴージャスです。しかし、そういう面白さもあるんですよ。第一、割り切っているから、女との間でごたごたする心配がまずない。越路さんの望んでいるのはそういう関係でしょう？」

「それはそうだが……」

越路はまだ割り切れない気持ちだった。

いくら割り切ると言つても、銭金で肉欲を満足させるほどせっぱつまっているわけではない。

ただ、なんかこうばあつと気分が晴れることをやってみただけだ。

「それ、そのばあつと気が晴れて、華やかなところと言えば、トルコしかないんですよ」

白井は確信ありげに言った。

そうあまりにも確信ありげに言われると、越路もいささか気が動いた。

白井完介はトルコ通として仲間うちでも評判で、あるトルコ風呂が手入れを受けたときに、参考人として警察に呼ばれたほどである。

調書を取られたあと、テレビなどですっかり顔を知られている完介は、係官から色紙を出され、その色紙にこう書いてきたと伝えられている。

『人事を尽くして、天命を俟つ』

そんな完介だから、彼の言葉には説得力があった。

「それに今のトルコ嬢は美人ぞろいで、銀座のホステスなんかよりずっとましですぜ。ホステスなんか口説いて

「ごらんさい。手間ひまはかかる上に、お金もかかる。

その上、あと腐れもないとは言えない」

銀座のホステスとも、ちょいちょい浮名を流している
完介の言葉だけに、真実味がこもっていた。

越路にしても、女性と一線を画するために、その辺の
ところではずいぶん苦勞してきた。

「そうか、じゃあ、一遍行ってみるけれど、完ちゃん、
よさそうなどころを紹介してくれるかい？」

「いいですとも」

完介は任せておけと言わんばかりに大きくうなずくと、
かたわらの電話の受話器をもう取りあげた。

「ちょっと電話をお借りします。こういうことは早い方
がいいですからね。今から心当りに連絡してみましょ
う」

なにも今すぐどうこうという気持ちではなかったが、
越路は完介の行動力に氣押されて、なにかも任せる気
になった。

受話器に向かって、完介は親しげになにやらしゃべっ
ていた。

「どうやら、トルコ風呂の経営者とかかなり親密な間柄ら
しい。」

「話は決まりましたよ」

完介は受話器を置くと、一枚のメモを越路に渡した。

そのメモには『白亜館』というトルコの名前と住所電
話番号が記してある。

「今晚の十時に予約をとっておきましたから、一緒に行
きましょう」

「ほう、きみもつきあってくれるのか」

「もちろんでしょう」

完介はニヤツと笑った。

「初会なのに、ぼくがついて行かなかったら、越路さん
も心細いでしょうからね。いや、別に面倒なことはあり
ません。ちょうどぼくも今夜あたり気晴らしに出ていこ
うと思っていたところなんです」

こうして、越路玄一郎は否応なしに、その街へ足を踏
み入れることになったのだった。

その夜九時過ぎに、白井完介は越路のマンションへ迎
えにきてくれた。

越路が年上ということだけではなく、仕事にしても遊
びにしても、なにごととも小まめに氣を遣ってくれる男で
ある。

「さあて、くりこみますか」

完介は玄関に顔を出した越路を見るなり、浮き浮きと言った。

「今頃、出発すると、ちょうどいい時間に向こうに着けます」

彼らがこれから行こうとする街は、多摩川を越えた向こう——つまり、東京ではなく神奈川にあった。

都心のマンションからは、車で三十分ぐらいのところである。

二人は通りでタクシーを拾い、運転手に行き先を告げた。運転手はちらつと後部座席を見たきり、なにも訊き返さなかった。

その街は場所を言っただけで、トルコ街と通じるところであった。運転手に見られて、越路は面映い気分を味わった。

ちらつと見た運転手の視線が、

(いい年をして、あんなところへ行く気なのかね)

と言っているように思われたのである。

完介の方は、そんな視線の一向に動じた気配は見せなかった。世間の人によく顔を知られている彼は、いちいちそんなことを気にしていたら街中もおちおち歩けないだろうし、トルコ通である以上、トルコへ行くときに妙

な眼で見られるのは、もうすっかり馴れっこになっているにちがいがなかった。

もし、運転手が「白井さんでもトルコへ行くんですか？」と訊いたりしたら、彼は陽気にこう答えるだろう。

「そりゃあ行くとも。運転手さんだって嫌じゃないんだろう？　これから一緒に行かないかい？」

そして、本当に運転手ともどもトルコへくりこんだにちがいない。それほど、完介はあけっぴろげでわいわいと遊ぶことが好きだった。その性格が誰にも愛され、仕事仲間にも遊び仲間にも恵まれる結果になっている。

越路は完介ほどにあけっぴろげになれず、年齢のこだわりもあって、いささかうしろめたい気分で黙りがちだった。

一人でしゃべりまくっていた完介がその様子に気づいたらしい。

「なんだか、浮かない顔をしていますねえ」

と越路の顔をのぞきこむ。

「イヤだねえ。まるで落語の『明烏』の若旦那みたいじゃありませんか」

「それほどウブじゃあないさ」

越路は苦笑した。

落語の『明烏』の若旦那みたいに、女を買うのがはじめてと言うわけではないし、そんな場所や女を買うという行為が汚らわしいと思うほど潔癖感を抱いているわけでもない。

しかし、やっぱり、若旦那のように否応なしに連れだされたという重苦しさはつきまといつていた。

「ウブじゃあないんだが、もうひとつ、トルコというのはしっくりしない感じがある」

越路は率直な感想を述べた。

「どういうふうに、しっくりこないんですかね？」

と白井完介が訊く。

「どういうふうにと言われると困るが、強いて言えばあまりに安直にセックスが受け入れられるということかなあ」

越路の中には、男女の仲というものはそう安直に成立しないという考えがある。男と女がおたがいに好意を持ち、紆余曲折を経てから結びつく。そうでないと、どうも本格的ではないという考えがある。

古い考え方かもしれないが、紆余曲折を経ていないと面白くない。男と女がそれぞれに悩んだり、迷ったりした末に、はじめて結びつくから、歓びも深い——と思

いこんでいるふしがある。

あるいは、男の立場から言えば、落としにくい女をなんとかなびかせてみようとする努力するプロセスが面白い。

そういうプロセスぬきのセックスは、あまりに単純すぎて味気ない。

「なあんだ、そういうことですか」

完介はやや軽蔑したように言った。

「でも、昔の赤線だってそうだったんじゃないですか」

「それはちがう」

と越路は応じた。

「ま、結局はセックスの売り買いの場だったにちがいはないが、女が売り手、男が買い手という立場がトルコほどはつきりしていなかったように思う。女は客を選ぶ権利があった。いや、そんな権利をみとめられない場合でも、好悪の情をはつきりさせる権利ぐらいはみとめられていた。嫌いな客には、扱いをわるくしてもよかったんだ。そこをなんとか男の方が扱いをよくしてもらおうと努力する。その辺に情緒があった」

「トルコだって同じだと思ふがなあ」

と完介はつぶやいた。

「だいたい、越路さんの言っていることは矛盾してま

よ。そういう男女のもつれあいが厄介になったから、単純にばあつと遊びたいんでしよう？」

そう言われては一言もない。たしかに、越路はあと腐れのないさばつとした遊びを望んでいた。と言って、排泄欲だけ満足させたいと思うほど若くはない。そのところに、たしかに矛盾がある。

「ま、ためしてみることですな」

いくら説明したってわかりつこないという表情で完介は言った。

「ただし、トルコでいいサービスを受けようと思っていたら、偏見を抱いていては駄目ですよ。それこそ、あなたの言ういい扱いを受けられなくなってしまう。つまり、トルコ嬢を軽蔑しないことです。そういう種類の感情に彼女たちは敏感ですからね」

「トルコ嬢に対して偏見なんか持つてはいないさ」

と越路は答えた。

「持てるわけがないじゃないか。彼女たちはいわばわれわれとは同業者みたいなものなんだから」

「同業者？」

白井完介は怪訝な顔つきをした。

「どういう意味です？」

「彼女たちは肉体の一部を使って金を稼いでいる。おれたちの書きは頭の一部を使って稼いでいる。上半身と下半身の区別はあるが、肉体の一部を切り売りしていることには変わりはない。だから、同業者みたいなもんさ。今でこそ、もの書きの社会的地位がいくらか上がって、大きな顔をしているが、戦前はそうではなかった。嫁の来てもなかったほどなんだぜ」

「なるほど、そういう考え方もあるか」

完介はケタケタと笑った。

「考えてみると、ぼくも日やとい労働者みたいなものですからね。ま、越路さんがそういう考えで、彼女たちにインティメイトな感情を抱いていれば大丈夫でしょう。ところが、そうじゃないのもいるんですよ。ぼくの紹介したあるタレントは、自分の名前が売れているもんだから、かなり大きな顔をしたらしい。で、すっかり相手の感情を害してしまって、ろくなサービスも受けられなかった。紹介者のぼくにぶうぶう文句を言うから、あとで事情を探ってみると、自分みたいな有名タレントにサービスできるのは光栄だと思えと言わんばかりの態度だったらしい。そういう男は、この世界では、いくら金があるうと、名前があろうとモテやしません。なにしろ、彼

女たちはそういうところでは人間を信用してはいないんです。本当の生地の部分を見ぬいてしまう。金や名声で飾り立てた男とつきあうわけではなく、文字どおり素っ裸の男とつきあうわけだから、彼女たちの男の生地を見ぬくカンはなかなか鋭いんです」

「なるほどねえ。そういうきびしきは昔の赤線と同じだなあ」

越路は少しトルコに興味が湧いてきた。

「もつとも、生地の部分で勝負ということになると、ますます自信はないがねえ」

それは正直な告白でもあった。

近頃、とみに性欲が衰えている。その分だけ、ぜいたくにもなったらしく、よほど好みの女性が相手でなくては男の役に立たない。

いや、好みの女性とそういう状況になった場合でも、ものの役に立たない場合がある。とにかく、はじめての相手にすぐそういうふうになるということはなく、二度、三度と会って、心身ともに馴れ合ってからでなくては、どうもしっくりこない。

(大丈夫かしらん)

と越路は心細くなった。

トルコではじめての女性が相方に決まっている。そういう相手とうまくいきそうにはなかった。

「さあ、着きましたよ」

越路の心細い胸の内も知らぬ氣に、白井完介が浮き浮きと言った。

タクシーはトルコ街の入口に駐っている。

『白亜館』はここから百メートルほど先ですが、そこまで歩いていきましよう。両側にずらっといろんなトルコが並んでいます。それを見ながら歩いてゆくのも楽しいんです」

完介ぐらいの年齢であれば、そうであろうと越路は思った。自分にも経験がある。たとえ入る気持ちになくても、昔、赤線をひやかして歩くのは胸がときめく思いをしたものだ。もつとも、入りたい気持ちはやまやまでも、その当時の越路は金がなくて、入れない場合の方が多かったのだが……。

二人はトルコ街を歩きはじめた。

昔の赤線よりずっと豪華ではあるが、やはり同じ淫靡な匂いを、この街は持っていた。そして、その匂いは若い雄にとっては刺激的なのだろうが、すでに初老にさしかかった越路にはちょっと重ったるかった。

完介は浮き浮きした足どりで歩き、時どき立ち止まっては、呼び込みの男たちと話をしたりしている。多分、トルコ通の彼にとっては、ここには馴染みの店が多いのだろう。

しかし、さばさばと楽しげにふるまって見えるのは完介一人だけで、この街を往き来する人たちはなんとなくしめって見えた。うしろめたい思いをかたい表情にかくしてそそくさと歩くサラリーマン、わざとらしく大声で友人と話し合いながら肩をふって歩くヤクザ風の男たち、彼らの身体から発散される欲情がしめり気となってこの街をおおっているように感じられた。

そんな気配が、昔、赤線をひやかして歩いたときめきとはほど遠いうつとうしさを越路に覚えさせた。

彼はこのまま帰ってしまいたい気持ちに駆られた。マンションへ帰り、ベッドにひっくりかえって、コーヒーでも呑みながら、好きな本でも読んだ方がどんなに楽しだろう。

(待て待て)

と彼はそういう自分をひきとめた。

(おまえも、もの書きのはしくれだろう。だったら、どんな場合でも好奇心を失ったらおしまいだぞ。おまえが

そんな退嬰的な気分にいるから、ろくな作品ができないんだ。せっかくのチャンスを見逃す手はない。ここではこの世界をすっかり見ておくことだ。ベッドにひっくり返って本を読むことなんか、いつだってできるじゃないか)

彼は完介がうらやましかった。完介の行動力と旺盛な好奇心、それになによりも若さがうらやましかった。

やがて、二人は『白亜館』に着いた。

それは純白の石で壁面をすっぽりとおおった建物だった。いかにも一流ホテルめいた豪華な雰囲気を出そうと苦心してあるが、そう苦心すればするほど安っぽくインチキな匂いがした。

入口を入ると、右手にフロントがあり、そこから愛想のいい声がかかった。

「これは白井先生、いらっしゃいまし。お待ちしておりました」

ホテルの支配人みたいな黒い背広に身をかためた男が玄関先に走り寄ってきて、にこやかに微笑みながら深々と頭を下げる。

「やあ」

完介はそのマネジャーらしい、でっぷり肥った黒服に

片手をあげると、ついでに右手の親指をつきだした。

「社長はいる？」

「はい、ただ今呼んでまいりますので……」

黒服が合図すると、若い衆がさっと二人の前にスリッパを揃えた。

「こちらへどうぞ」

靴を脱ぎ、二人はモス・グリーンの部厚いカーペットを敷きつめた廊下を通って、奥の方へ案内された。

壁には白地に金銀のカエデをあしらった壁紙が張りめぐらされてあり、ところどころ金屏風が置いてある。ゴージャスな雰囲気を出そうとしているらしいが、それがかえって成金趣味で安っぽく、この館全体にただよっているしめった淫靡な空気とともに、越路にいかがわしい印象を与えた。

もっとも、セックスの処理場として考えれば、赤線時代の建物とは大ちがいで、こっちの方が格段にぜいたくなかまえになっている。赤線の中には、それこそ排泄処理場そのものと言った感じの部屋がたくさんあった。周囲はベニヤ張りの板で、しかも、階段の真下だから、天井が傾いてみえるというような四畳半である。

その茶色に変色した畳の上に敷かれたセンベイ布団

の上で、女がさあいらっしやいとせきたてる。男は味気ない思いで、せかせかと事をすまさないければならないわけだが、なぜか、越路にはそっちの方がシンプルでストレートなさわやかさがあつたような気がした。

もちろん、昔の思い出だから、なつかしさと感傷が美化しているのかもしれない。第一、あの頃は越路も若かった。排泄欲を満足させれば、ずいぶんとすっきりできた時代ではある。

若さはふんだんにあるかわりに、金の方は反比例して年中びいびいしていた彼は、格安のところばかりしか通えなかったから、赤線の中でも高級な店は知らず、赤線と言え、うら寂しいイメージがつきまとう。しかし、そのうらさびしさがまた、センチメンタルななつかしさを誘うのだ。

黒服の男に案内された部屋はふつうの待合室ではなく、一種の特別室らしかった。

ここには青磁色の深々とした絨毯の上に、白革ばりのソファやラウンジ・チェアが置いてあつて、部屋の片隅にはこぢんまりしたバーさえしつらえてあつた。

どうやら、白井のような上顧客だけを通す部屋のようであつた。